

INDEX

- 1 「ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世帰天に関し～徒然なるままに」
どらエモン
- 2 高橋弘のモルモン人物伝(5)
テルマ・ギアーが語る「マウンテン・メドウの大虐殺」中編
- 3 投稿 「唯一真という無誤謬思想への甘え」 ねこばんち
- 4 連載 リアホナを斬る (第5回) 木塚灯八
2005年4月号 大管長会メッセージ「わたしたちの信仰の象徴」
- 5 モルモンQ&A 「宣教師の規則」 しげ
- 6 会報遅配のお詫びほか
- 7 ニュース

「ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世帰天に関し～徒然なるままに」
どらエモン

去る4月2日ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世が帰天しました。ヨハネ・パウロ二世は言うまでもなくローマ・カトリック教会の最高聖職者でありましたが、カトリックと縁のない自分はバチカン市国の元首という立場で国際的に平和、外交路線を邁進し、先のアメリカのイラク侵攻に際してはブッシュ大統領に対し側近を特使として派遣し強力に反対したことが思い起こされます。結局はイラク侵攻を食い止められなかったのは周知の事実ではありますが、そのブッシュ大統領が夫婦で葬儀に参加したとのこと。ブッシュ大統領はプロテスタントですが亡きヨハネ・パウロ二世へ赦しを乞うたのか？

さてそのローマ教皇ヨハネ・パウロ二世に対しては世界各地の様々な宗教指導者からのメッセージが寄せられているがモルモンの最高聖職者である大管長会も例外ではないらしいです。しかしこれにはモルモン脱会者である自分にとってはおかしな話であります。自分たちの教会を唯一真の教会と云って憚らないモルモンにとってカトリックは異教そのものであります。そして、大管長会に次ぐ聖職者である十二使徒であったブルース・R・マッコンキー(故人)は「真の教会」(モルモンのこと)以外はすべて「悪魔の大教会」とまで自著で述べているほどであります。いわば、唯一真の教会のトップが悪魔の大教会のトップの死にお悔やみを述べているのであります。自分にとっては些か解せない話であります。もっと言えば、カトリックの「権威」に表面的に平伏し、「私たちもクリスチャンです。まともな宗教です」と摺りよっていくようにしか見えません。

しかし、カトリックの場合妊娠中絶や避妊、同性愛といった現在カトリックで認められていない行為の教義に対しかなり高位の聖職者も参加する「改革派」と呼ばれる勢力が大っぴらに活動し、それが半ば既成事実化されていることに対し、モルモンでは教義に反対する活動を行うと「永遠の生命を得る」ための儀式を行う神殿(日本では東京と福岡の二カ所)に参入する為に必要な推薦状の発行がされず、事実上教会員としての権利が制限されます。また、モルモンは「生ける預言者」である大管長はじめ末端のユニット(ワード・支部)の指導者まで全てに対し絶対服従であります。その服従の否かを確認するために、定期的に日曜日の出席者全てに「支持」という名の元の挙手を求めるのであります。この点からもカトリックとモルモンの違いが明確であります。しかも、最近問題になった聖神中央教会等の一部のカルト化された教会を除き、モルモンのように指導者に対し絶対服従を求めるプロテスタントの存在は聞いたことがありません。

蛇足ですが、モルモンの指導者に対する絶対服従という点についてです。これは特に地方が多いのですが、慢性的な人材不足の為人間的に問題のある人物でも容易に指導者の立場に就けることが多く、かつ指導者の立場に就く際にしての教育プログラムも存在しないため、ことに末端のユニットでは指導者と一般の教会員の間で軋轢はかなり多岐にわたります。しかし、一般の教会員に対して「愛がない」「指導者も完全ではありません」「指導者を支持出来ないのですか？」などと片付けられ、軋轢が表面化することは殆どなく、逆に精神的疾病に罹る教会員もなかにはおられる程です。「クリスチャン」「キリスト教会」と呼ぶには組織的にも難ありです。

最後に、残念ながらモルモンの社会奉仕活動へ理解を示すカトリックやプロテスタントの聖職者が一部いらっしゃるようです。しかし、それさえもモルモンは機関誌等で大々的に取り上げ、教会員の信仰鼓舞への一助としているのである。無論、その一部のカトリックやプロテスタントの聖職者も社会奉仕活動そのものに評価しているのであって、モルモンそのものを評価しているのではないことは大いに推測できますが、結果的にモルモンの活動を助長している面は否めません。近所のカトリックやプロテスタントの多数は、配布チラシ等で「統一教会(世界基督教統一神霊協会)やエホバの証人(ものみの塔)、モルモン教とは、一切関係ありません。」と紹介されており、モルモンの実態をある程度は理解されていると思われそうですが、カトリックやプロテスタントの聖職者の方々へモルモンを正しく理解して頂く機会が今後あればと願う今日この頃

目前に迫った戦いにインディアンを動員し彼らに一肌脱いでもらおうという責務遂行に熱心だったジェイコップ・ハンプリンは、ブリガム・ヤングに相談するためその地域のインディアン酋長たちを連れソルトレーク・シティに赴く。『ジャーナルに見るモルモン教会史』には、1857年9月1日付で、「ジェイコップ・ハンプリンは大管長ヤングと会うために12人のインディアン酋長とともにサンタ・クララ・ミッションからソルトレーク・シティに到着……大管長ヤングはインディアンたちと一時間の会談をする」という記述がある。記録によればブリガム・ヤングは、「われわれモルモン教徒を援助しなければ、合衆国はわれわれモルモン教徒とインディアンの両方を殺害するであろう」とインディアンを説得したという。その7日後、インディアンの酋長たちと400名の勇敢なインディアンたちは、わが曾祖父ジョン・D・リーほか53名のモルモン教会のリーダーたちに加わり、マウンテン・メドウズにおいて移動の途上にある移民(開拓民)の一行を襲撃した。

熾烈な戦闘が始まった。しかし移民たちは幌馬車で円陣を組み勇敢に反撃してきたので、モルモン教徒とインディアンたちは驚いたのだった。移民たちは家族と自分たちを守るため必死の抵抗を試みたが、それがまるまる5日5晩に及ぶ苦しく恐ろしい戦いになった。短時間で簡単に決着すると思っていた襲撃だったが長引く消耗戦に疲れ果て、いったん退却し、教会の「戦争会議」を開いて協議を行い、この戦闘をいかに短時間で終結させるかが議論された。かれら移民たちを堅い守りからおびき出し、予め計画していた略奪を決行するため、モルモンの指導者たちは一計を案じた。それは移民たちに、もしも武器を渡し彼らの身をわれわれに任せるとセダー・シティまで安全に警護しよう、という誘いであった。恐怖におののき戦闘に疲れきっていた移民たちとその家族は、提案してきたモルモン教徒が白人であり、きっと友好的でインディアンから自分たちを護ってくれる味方に違いないと信じ、その提案を呑んだ(襲撃したのはインディアンたちとインディアンに変装したモルモン教徒だったから、移民(開拓民)たちはインディアンに襲われたと勘違いをしていたのである)。

こうして移民たちは塹壕から出て、それぞれの男性開拓民の横に一人のモルモン教徒が張り付き、キャニオン(渓谷)を一行になって歩いた。それから、「Boys, do your duty」という予め決められていた暗号の言葉が出されたとき、モルモン教徒たちは銃をもたない無防備な移民に一斉に襲いかかり、冷血にも移民たちを虐殺した。またモルモン教の長老たちはそれまでの銃撃戦で負傷し幌馬車の中で手当てをうけていた移民たちをも襲い全員虐殺した。また恐怖でおののき逃げ惑う女や子どもたちに対してはインディアンに殺害させ、その頭皮を剥がさせた。モルモン教徒が「罪のない魂の血」を流した責任をとらずに済むためであった(また、この事件がインディアンによるものであることをカムフラージュするためであった)。

このとき合わせて127名の男、女、子どもが、常軌を逸したモルモン教の長老たちすなわち彼ら全員がその地域の指導的長老や監督であったの手によって、またモルモン教徒によって獲物の家畜を奪うことを唆されたインディアンの手によって、無慈悲にも殺害されたのである。「マウンテン・メドウズの大虐殺」として知られている、宗教指導者によって実行された卑劣きわまりない皆殺しの虐殺事件が、アメリカの歴史が始まって以来前例のないもとも血なまぐさく、もっとも冷酷な事件として記憶されている。これに匹敵するのは近年になって起きたガイアナにおける「人民寺院」の集団虐殺事件くらいなものだろう。

この惨たらしい虐殺事件の直後、モルモン教徒たちはインディアンたちの食事のために、移民たちの家畜を殺し調理してインディアンに振る舞った。そうしてインディアンを食事に引き止めている間、他のモルモン教徒たちは移民たちのキャンプ地で所持品を略奪していたのである。彼らは騒々しく歓喜の奇声を発しながらポットやなべ、皿や衣服を漁っており、また他の者らは溪谷に冷たく血だらけで横たわる開拓民から、衣服、靴、金銭、時計、ナイフ、その他の貴金属を剥ぎ取っていた。そしてモルモン教徒を助けた勇敢なインディアンたちには豪華な食事と略奪品の一部が提供された。

翌日、戦闘による山のような略奪品すなわち、多数の牛、幌馬車と馬、家財道具、宝石や貴金属、そして揺れ動く馬車のベッドの中に一つの固まりになって、目前で親を殺されあまりの恐怖と悲しみで泣きじゃくる17人の移民たちの幼い子どもたち(この子どもたちが助かったのは、まだ幼少なので決して虐殺者を訴えることはないだろうという理由による)をセダー・シティに運ぶ、血しぶきが付着し疲れきったモルモンの長老たちの姿は、おぞましく陰鬱な光景だったに相異なる。これらの子どもたちは、彼らの両親を殺害した、しかし良心の呵責にさいなまれたモルモンの長老たちの家庭に引き取られていった。

また、この虐殺のかかわったことによる罪の意識にさいなまれたせいなのか、セダー・シティのモルモン教会には虐殺された移民から略奪された品々が奉獻されたという。高名で、初期のモルモン教の歴史に詳しい歴史家ジュアニタ・ブルックスは、この虐殺事件がセダー・シティの人々にいかに深く影響を及ぼしたかについて述べている。

「什一献金を収める事務所のまえに置かれた幌馬車や、多くの家庭に引き

ウンテン・メドウズにおける悲劇をつねに思い起こさせた・・・

いまや什一献金を収める事務所の棚には、サイズ毎に紐でくくられた多くの靴と、様々なキルトや毛布、種々の調理道具や皿や、衣服が置かれていた。そして、かつて血だらけだったシャツやドレスの話、何度も繰り返して水洗いと石鹸洗いされ、アイロンがかけられたシャツやドレスの話が、また、その仕事を命じられ、気持ちが悪くなって卒倒しそうになったけれど、気丈にも口をかたく結び、ただ黙々とその仕事をこなした女性たちの話が、ヒソヒソと小声で交わされるのだった・・・」(Juanita Brooks, John Doyle Lee, p.225) ...続く

参考文献

Thelma 'Granny' Geer, Mormonism, Mama & Me, Moody Press, Chicago, 1986

Juanita Brooks, John Doyle Lee - Zealot, Pioneer Builder, Scapegoat, Utah State University Press, 1992

Juanita Brooks, The Mountain Meadows Massacre, University of Oklahoma, 1962

John D. Lee, Confession of John D. Lee, photo-reprint of 1877 edition

高橋弘「ユタ準州開拓史」国際コミュニケーション学会『国際経営・文化研究』、Vol.7 No.2 2003.3

投稿 「唯一真という無誤謬思想への甘え」 ねこばんち

私自身はモルモン教会員としての経験は無いのですが、両親が10数年前にバプテスマを受け改宗して以来、モルモン教会とは既に数年に渡り様々な形で関係を持っています。

それまでは、モルモン教のことは勿論、キリスト教についてもほとんど何も知らなかったのですが、これを機会にキリスト教や宗教について色々勉強してみました。しかしモルモン教については納得のいかないことばかりで、またモルモン教会の主張することは実に独善的で身勝手に、たとえ教会内では通用しても、一般社会の常識的な価値観とは隔絶した、奇妙な主張ばかりだと言わざるをえません。

その思想には、自己の過ちを正当化し、他者を排斥・非難する身勝手な思想が散見されますが、中でも私が特に気になったのが、「この教会は(ジョセフ・スミスによって回復された)唯一真の神の教会です」という思想です。

そもそも私のような、特にこれといった信仰心を持たない者には、「この教会だけが唯一真で、他は全て悪魔の教会だ」などと他者を批判・否定する独善的な思想自体が理解出来ないのですが、それ以上に問題に感じるのは、この思想がしばしば「モルモン教会は無誤謬である」という、何の根拠も無いことの証明として利用されているという事実です。

現在モルモン教会では、脱会希望の信者(教会員)の意思や尊厳を無視した指導者の問題発言や、また、一般社会での強引で悪質な布教・勧誘活動などを初めとして、様々な反社会的行為が問題になっていることは有名な話ですが、モルモン教会側は、これらの問題を一切反省・謝罪しようとしません。

まともな宗教なら、自らが問題を起こしていることを反省・謝罪するのが当然でしょうけれど、モルモン教の場合は、そもそも現実に問題を起こしている事実さえ認めようとしません。そして、その過ちを強化してしまっているのが、この「唯一真」の思想なのです。

では彼らはなぜ、「唯一真の教会」であることが「自分たちは間違ったことはしていない」という証明になるのと思い込んでいるのでしょうか？それは、彼らにとっては、モルモン教だけが唯一人間を救う方法を知っているただ一つの教会であり、他の教会や宗教に行っても救われず、それならたとえどんなに嫌われても、無理矢理にでもモルモン教会に入信させ、また引き止めておくことが「その人のためになるから」という、他者の意思や自由・尊厳を無視した実に身勝手な発想が、この「唯一真」という思想の根底にあるからです。

更に彼らは、これらの問題を現実に起こしているにも関わらず、「この教会は唯一真の教会だ。だから問題を起こすはずなどない」「仮に何か世間から非難されるようなことがあっても、他の教会と違って『唯一真の教会』だから、神の意に反するような間違いを指導者が犯すはずがない」「間違っているのは教会(の教え)ではなく、一部の人間の行いである」「批判する人間こそが、サタンに唆されている、間違った人間なんだ」などという実に利己的な発想による言い訳を並べ、決して過ちを認めようとはしません。

しかし、まともな人間なら、これを聞いて何か納得出来る部分があるのでしょうか？「唯一真」などというのはモルモン教会側の勝手な言い分であって、一般の人にとっては、そんなことは何の関係もないのです。モルモン教会が勧誘・脱会問題や教会内でのイジメなど、数々の問題を現実に起こしていることは、否定することの出来ない「事実」なのです。

むしろそれどころか、「唯一真」の教会・教えのはずなのに、どうしてこんなに信者が問題ばかり起こすのでしょうか？聖典やテキスト、指導者の言葉な

りも信じているはずの教会員の行動が、他人を苦しめ不幸にする問題だらけのものでは、そんな「絵に描いた餅」「机上の空論」のようなモルモン教会の教えなど、「唯一真」でも何でもないことを、自ら証明しているようなものです。

皆さまもご存知かと思いますが、先日、カトリックの最高指導者であるローマ法王ヨハネ・パウロ2世が亡くなりました。カトリック教会も、過去には「キリスト教の正統派」としての看板を盾に、十字軍の派遣や魔女狩り・異端審問など、数々の消すことの出来ない問題を起こしましたが、ヨハネ・パウロ2世は、これらのいくつかの問題について、教会の責任者として公式にカトリック教会の罪を認め、謝罪しています。謝罪をすればそれでいいというものではないのかも知れませんが、少なくともモルモン教会のように、現実に問題を起こしていることさえ認めないのとは、雲泥の差があります。こういった謝罪行為は、ともすればその団体にとって不利になるかも知れないリスクを持っているにも関わらず、ローマ法王は勇気を持ってそれを行ったのです。過ちや罪を認め謝罪することは、長い目で見れば、決してマイナスではないと、私は思います。世間もそれを評価するのではないのでしょうか？「信用」とは、こういった形で築いていくものであって、「唯一真だから間違っていない」などと、自己満足の強硬姿勢で社会に無理矢理求めるものではないと思います。

「唯一真」という思想は、決してモルモン教が「無誤謬」であるということを保証するものではないのです。モルモン教は、その特異な教義を評すれば確かに「唯一」かも知れませんが、しかしその精神や思想は「真」でも「無誤謬」でも何でもありません。「唯一真という無誤謬の思想」にいつまでも甘えていては、モルモン教会が世間から認知される日は決して来ないでしょう。

連載 リアホナを斬る (第5回) 木塚灯八
2005年4月号 大管長会メッセージ「わたしたちの信仰の象徴」

正統のキリスト教をちゃんと学んだ人にとってモルモンの教義は「誤解している」と言うレベルを超えて、「あまりにゆがめられている」と感じずにはいられない内容なのですが、今回取り上げる2005年4月号の大管長会メッセージの中でヒンクレー大管長が言及している十字架に対するモルモン教会の態度もその一つです。

モルモンの教義は正統のキリスト教会の教義や考え方を良く知らない人たちに対して、キリスト教会の問題点としてしばしば世間の話題に上るようなことを誤解を招くように説明し、それに対する真の解決はモルモン教会にこそあるのだと誘引するような構成になっています。これは宗教団体として卑劣極まりない手段であり容認できるものではありませんが、キリスト教についてよく知らない人々をモルモン会員にさせることに一定の効果を上げています。しかし、モルモン会員にならない人やモルモンをやめた人にもキリスト教について誤解を持たせたままにしているわけで、キリスト教会が被っている迷惑は相当なものであらうと思います。

こうしたキリスト教を誤解させるモルモン教義はいくつかあるのですが、今回の大管長メッセージにもある十字架について考えてみたいと思います。まずアリゾナのメサ神殿の一般公開期間中にヒンクレー大管長がプロテスタントの牧師から受けた質問のやり取りが記事にはこう書かれています。

その牧師は言いました。「この建物の中をひととおり見てきましたが、入り口の所にイエス・キリストの名前があっただけで、キリスト教の象徴である十字架はどこにもありませんでした。ほかの地に建てられているあなたがたの教会の建物にも、同様に十字架は見受けられません。どうしてなのですか。あなたがたもイエス・キリストを信じていると聞いています。」
わたしはこう答えました。「同じキリストの教えを奉じる者として、聖堂の尖塔や礼拝堂の祭壇に、また式服や書物などの上にも十字架を付けていらっしゃる皆さんの考えに異論を差し挟むつもりはありませんが、わたしたちにとって、十字架は死に瀕したキリストの死を象徴するものです。しかし、わたしたちが世の人々に伝えたいと願っているのは、生けるキリストにほかならないのです。」

モルモン会員だった方は上記のような「十字架を使わない理由」の説明を耳にしたことがおありだと思いますが、これは良く考えるとおかしいことです。なぜならキリストは処刑されたのでしょうか？『自ら命を捨てられた』のであるとモルモンでも説明していたのではありませんでしたか？キリストが命を捨てられたのは人類を救うためであり、その偉大な行いを完成された場所が十字架の上でした。十字架はキリストの愛を象徴するものとして最もふさわしいと昔から考えられてきたのは道理だと思います。この点でモルモンの考え方が大きな誤解であることが明白です。

なおヒンクレー大管長は次のようにも説明しています。

これがキリストの十字架が示している事柄です。十字架はキリスト、すなわち平和の君を苦しめ、滅ぼすために用いられた恐ろしい刑具であり、病人を癒し、盲人の目を開き、死人をよみがえらせてくださった救い主の奇跡の業に対する悪意に満ちた報酬でした。

同僚と分かれる（スプリット）ことです。

「準備の日」以外は効果的に伝道活動を行うため、「同僚スプリット」出来ます。

<注3>「電気手帳」「電気辞典」は正しくはそれぞれ「電子手帳」「電子辞典」であると考えられます。

伝道部により、多少の差はありますが、彼らはとても厳しい規則の下で伝道活動を行っています。このような細かい規則によって縛らなければ、「伝道活動に専念できない」また、「主の僕としてふさわしい行動を取ることができない」そんな彼等を専任宣教師として召しているモルモン教会をみなさんはどう思われますか？

会報遅配のお詫びほか

本号発行担当者の多忙と原稿取り纏めの遅延が重なり、本号の発行が遅れました。読者の皆様には多大なご迷惑をおかけしたことを深くお詫び申し上げます。

また、原稿執筆者各位におかれましてはご多忙の中本号発行に際し最大限のご協力を頂き、誠にありがとうございました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

ニュース

会報2号でご案内したジョン・クラカワーの「Under the Banner of Heaven: A Story of Violent Faith」が邦題「信仰が人を殺すとき」として4月20日に出版されました。高橋弘先生が日本語版解説を書かれています。先生から同書についてコメントをいただきました。

ところでジョン・クラカワーの本『信仰が人を殺すとき』が20日に出版され、売り出されます。今回、日本語版の解説を書きましたが、モルモン教の歴史をまた異なった角度から読むことができるなかなかよく書けている入手する価値のある本です。「マウンテン・メドウズの大虐殺」も二章を割いて述べています。マイケル・クインの本や、今回引用したジュアニタ・ブルックの本をよく研究して書いており、ただの面白いだけの本でないことは確かです。モルモン教会が禁書に指定したい類の本だと思います。

当会でも取り扱いしています。ご注文は以下から。

<http://seitonomichi.maxs.jp/mart/mart>

勇気と真実の会は会員募集中です。
詳しくは当会へお問い合わせください。

投稿記事募集

脱会体験、モルモンについて思うことなど、なんでもお寄せください。
文章はプレーンテキストで作成してください。

メールマガジンバックナンバーはこちらから

<http://cgi.kapu.biglobe.ne.jp/m/9211.html>

メールマガジンの購読申し込みはこちら

http://jemnet.hp.infoseek.co.jp/htm/biglobe_mailmaqa.htm

- ・発行者 勇気と真実の会 会報編集部
- ・ホームページ <http://jemnet.hp.infoseek.co.jp/>
- ・メールアドレス jemnet@infoseek.jp

Copyright(c)1999.JEMNet. All Rights Reserved.

無断での転載・転写・複写・転送などは禁じます。
転載・複写の際は、事前に発行者へご連絡ください。

【解除はこちら】

<http://cgi.kapu.biglobe.ne.jp/m/9211.html>

このめるまがはお客様からのご登録に基づき、カプライトより配信されました。